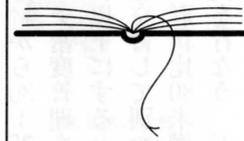


図書紹介



円満字正和・著

『登山家高木正孝
生とアルピニズム』
その人



2007年3月
ポイジャー社理想書店刊
B6判 384頁
頒価 3015円(送料込)

岩波書店『パタゴニア探検記』

は戦後登山文学の傑作として、世
代を超えて40年近く読み継がれて
きた。その著者・高木正孝とはい
かなる人物か――。

高木は1913年、祖父を慈恵
医大の創設者とする家系に生を得
る。成蹊高校時代から谷川岳岩壁
登攀で活躍。東大を経てベルリン
大学に留学。戦時下のドイツ、ス
イスで氷河技術を学び、本場のア
ルピニズムを習得する。
戦後帰国し、気鋭の心理学者と

して神戸大学に赴任する。

戦後の国家的壮挙であった日本
山岳会のマナスル登山では、先遣
隊として中心的役割を果たした。

神戸大学では若い山岳部員の育
成に努め、その成果は1958年、
日本チリ合同パタゴニア探検隊ア
レナレス峰初登頂として結実する。
本書の著者は当時29歳で、参謀
役としてパタゴニア探検に参加し、
高木と6カ月間行動を共にした。

チリ隊員との心理的な葛藤、猛烈
な蚊との悪戦苦闘、氷河上の困難
なルート探索など、本書では『パ
タゴニア探検記』とは違った視点
で高木の躍動する姿が生々しく綴
られている。

高木の死はまったく予期しない
場所、南太平洋上で起こる。マル
ケサス諸島で学術調査中の高木は、
1962年8月6日、突如として
スクーター船上から姿を消すので
ある。著者は八方手を尽くして失

踪の原因に迫ろうとするが、謎は
深まるばかり。

高木の49年の生涯は波瀾に満ち
みち、まことに並々ならぬものが
あった。

旧友・田口二郎は、高木を評し
ていう。

「ある社交パーティーで、ダイナ
ジャケットを着こんでくつろいで
いるチャカ（高木の愛称）を見て
それを自然と思うし、その翌朝、
同じ本人が橋の下で浮浪人と枕を
並べているのを見ても不思議とは
思わない。そういう男だったよ」

高木は孤高の放浪者の一面をも
つていた。高木の生涯は、二十世
紀を生きた高貴で魅力ある行動者、
思索者の一典型として普遍性をも
っている。

本書はアルピニズム論としても、
人間論としても興味の尽きない評
伝となっている。

*問い合わせ先はポイジャー社
03-5467-4646

*注文先はコンテンツワークス
1020-298-956

(岡市敏治)

金田正樹・著

『感謝されない医者
ある凍傷Dr.のモノローグ』



2007年3月
山と溪谷社刊
四六判 245頁
定価 1680円

800人以上の凍傷患者を診て
きた医師のモノローグである。完
治して当たり前、指などを切断せ
ざるを得なかった重症患者にはほ
んど感謝してもらえない、損な
役回りを一手に引き受け治療を続
けている医者が、その体験を綴る。
凍傷を防ぐにはどのようにした
らよいか、雪山、冬山に入る登
山者には必読の書である。

第Ⅱ次RCCエベレスト登山隊
で加藤保男の凍傷治療を行なうが、
治療について確たる文献もなく、
試行錯誤した様子が伺える。その
後の経験から、凍傷に無知な医師
の治療や投薬、患者の素人療法で
凍傷患部をより悪化させた具体例
を述べている。

剣沢SOSには、夜間の釧岳救
援登山や救助事例にまつわるエピ
ソードが綴られ、医師としての責